

氏名	五十嵐 由里子 ^{いがらし ゆりこ}
学位(専攻分野)	博士(理学)
学位記番号	理博第2006号
学位授与の日付	平成11年1月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	理学研究科動物学専攻
学位論文題目	Subsistence activities of prehistoric Polynesians —Analyses of shell artifacts and shell remains excavated at prehistoric sites on Mangaia, Cook Islands— (先史ポリネシア人の生業活動—クック諸島マンガイア島から出土した 貝製品および貝殻遺物の分析—) (主査)
論文調査委員	教授 石田英実 教授 西田利貞 教授 堀 道雄

論 文 内 容 の 要 旨

申請論文は、ポリネシアの中央部にあるクック諸島、マンガイア島の先史遺跡で発掘調査を行い、そこで出土した人工遺物と動物遺物、ことに釣り針などの貝殻製品や貝殻遺物を非常に詳細に分析することによって、併せて現生貝類のフォウナと生態を調べることによって、先史ポリネシア人の生業活動、特に漁労活動と貝利用の実態を解明することを目指すとともに、生業の変遷、島の中の生業パターン、島の外との交易活動を推論しようと試みたものである。

申請論文は3部作で構成されるが、主論文1では申請者本人が発掘を担当したワイロログ遺跡で出土した人工遺物、魚介類遺物、遺構などを細かく記載、分類、比較分析して、この遺跡の性格、遺跡を残した人びとの生業内容、生業活動の時代変遷などを考察している。当遺跡は火山と隆起サンゴ礁が複合した島(マカテア型)であるマンガイア島の海岸部に立地しており、ポリネシアの中でも有数の規模を誇る先史遺跡であるが、この研究によって、この遺跡が今から千年近くまで遡る生活遺跡であること、はじめの頃は漁労活動が活発に展開されたが、それが次第に衰退して、むしろ陸上での活動が盛んになったことなどを明らかにした。

主論文2では、ワイロログ遺跡および、同じくマンガイア島にあるが立地条件を異にするガアアイツタキ遺跡の二つの先史遺跡から出土した合計95例の貝製の釣り針について形式分類を試み、形態学的方法で比較分析するとともに、製作工程などを推定している。そして、ほとんどの釣り針は南太平洋の島々で共通する方法で作られているが、両遺跡で釣り針の形式や材料の貝種に差異があることを明らかにした。その結果から、海岸部のワイロログ遺跡を残した人びとは他島と活発に交流し、外洋、サンゴ礁内の両域で漁労したのに対して、内陸部のガアアイツタキ遺跡の人びとは主にサンゴ礁内で漁労し、あまり他島と交流しなかったらしいこと、つまり同じ島でも生業パターンが違う人びとが共存していた可能性があることを具体的に示した。

主論文3では、ワイロログ遺跡から出土した貝殻遺物、ならびに現棲の貝類相を定量的に分析して、先史時代の人びとが食料や加工材料として利用した貝類の種類を特定するとともに、それらの採集方法を推定している。その結果、大型の貝類を選択的に利用する傾向があったこと、とくに利用効率が高いマルサザエを最もよく利用したこと、サンゴ礁の生態条件をフルに利用して貝採集に励んだらしいことを明らかにした。

上記の研究成果を総合すると、マンガイア島の先史ポリネシア人が魚貝類を無駄なく非常に効率的に利用することによって島嶼環境に適応していたこと、一つの島でも複数の生業のパターンがあったこと、遠距離の島とも活発に交流していたことなどが実証できたと結論できる。

論文審査の結果の要旨

ポリネシアの島々には文字が存在しなかったため、ヨーロッパ人との接触が始まる二百年前の頃より以前の人間の歴史は、伝承による以外はほとんど何も分からない。先史ポリネシア人の移住のプロセス、歴史、生活などを復元するには、現地調査に時間と労力を傾けて広範な資料を収集し、生物人類学、先史人類学、生態人類学などの方法で多角的に分析して、その結果を積み重ねて総合的に実証していくほかない。ひとつの島に集中して、先史人類学的研究をインテンシブに進めた例はこれまで皆無に近く、この研究は貴重なモデル研究となる。

申請者は、遺跡の発掘調査によってえた生活遺物や動物遺物を考古学的に分析するだけでなく、同時に現棲の魚貝類の分布や捕獲方法などについて詳細な生態学的調査も実施している。たんに過去の人びとの生活を平面的に復元するだけでなく、個々の遺物で得たデータと生態学的データを調合することによって、よりビビッドな形で先史ポリネシア人の適応戦略を解明せんとするためである。この複眼的な研究方法は非常にユニークで、一応の成功を収めており、いくつかの刺激的な研究成果を達成している。

また従来、あまり注目されなかった先史ポリネシア人の貝利用の問題に主眼をおき、個々の貝殻遺物を丹念に分類、記載、同定して定量分析するとともに、とくに貝製釣り針などの貝殻製品について、それらの型式と機能と製作工程などを徹底的に比較分析している。もとより太平洋の島嶼環境では貝類はありふれた物であるが、それだけに貝種に対する選択性があり、利用効率にこだわり、クロチョウガイを交易品としたことなどを実証する知見は、過去のポリネシア人の生活に意外な側面があったことを示す。

こうした研究成果のうち、もっとも評価できるのは、太平洋の島嶼で限定された天然資源を無駄なく効率的に活用してきたポリネシア人の適応戦略の中身を非常に具体的に解明したことだろう。貝資源にいたるまで、サンゴ礁の恵みを最大限に利用し、たんなる食料としてだけでなく、非常に精巧な方法で各種の生活道具に加工したり、バラエティに富んだ形式の釣り針など製作していた実態を明らかにしている。さらに釣り針製作の各種の技法が広い地域で共有されていたこと、釣り針の材料となるクロチョウガイを広く伝播していたことなど、これまでに考えられていたよりも活発に島嶼間の交流があったらしいという新しい知見を具体的に示したことは大いに評価できる。

このように申請者は、非常に斬新な研究方法で幾つかの実証的な知見を導くことにより、ポリネシア人の先史人類学的な研究に大きく貢献している。

よって本論文は博士（理学）の学位論文として十分な価値を有するものと認められる。なお、本論文に報告された研究業績を中心に、参考論文の内容、ならびに関連した研究分野について口頭試問を行った結果、合格と認めた。